

自然科学研究機構 分子科学研究所 (IMS)

分子研アーカイブズの現状

木村 克美 (分子科学研究所)

1. はじめに

分子科学研究所 (分子研) は、昭和 50 年 (1975) に全国大学共同利用機関として設立され、平成 17 年 (2005) に創設 30 周年を迎えました (文献 1, 2)。それを受けて、一昨年 (2006) 史料編纂室が設けられ、アーカイブズ活動を始めています (文献 3)。アーカイブズ活動のノウハウについて、総研大や核融合研の方々に大変お世話になり感謝しています。

分子研史料室の当面の目的は、分子研創設に至る経緯に関する史料および創設第一期の史料の収集・分類・保管です。分子研設立は、日本学術会議の勧告が出てから 10 年もかかっています。それ以前に、日本化学会将来計画委員会を中心に、分子研設立に向けての重要な動きがありました。分子研設立案が作成されたのもこの時期です。ほぼ 14 年間にわたる分子研設立までの動きとそれに関する史料の収集・保存について、最近の状況をお話しさせていただきます。まず最初に、分子研の機構改革の変遷について簡単にふれておきます。

2. 分子研の 30 年間の機構改革

分子研は、最初の 6 年間、独立の「全国大学共同利用研究機関」という立場でした。ところが、昭和 56 年に分子研は同じ岡崎のキャンパスにある「基礎生物学研究所」(基生研) および「生理学研究所」(生理研) と統合して、「岡崎国立共同研究機構」の組織ができました。最近 (平成 16 年) さらに国立天文台および核融合研究所とも統合して、「自然科学研究機構」に換わりました。表 1 にその経過がまとめてあります。

第 I 部 本研究課題の成果報告

表 1. 分子科学研究所の機構改革（30 年間）

昭和 50 年	分子研の設立（独立した全国大学共同利用研究機関）
昭和 56 年	岡崎国立共同研究機構（分子研・基生研・生理研）
平成 16 年	自然科学研究機構（天文台・核融合・基生研・生理研・分子研）

3. 分子研創設に至る約 14 年間の経緯

日本学術会議から「分子研（仮称）設立」の勧告が出てから創設まで 10 年かかっています。分子研設立の動きが国内で表面化したのは、学術会議の勧告が出る約 4 年前でした。表 2 に分子研設立までの約 14 年間の流れがまとめてあります。

昭和 36 年、「分子科学」総合研究が認められました（代表：小谷正雄先生）。「分子科学」という名前が公の文書に載ったのは、これが最初だったそうです（文献 4）。分子研設立の意図は、「量子化学を基盤とする分子構造・分光学などわが国の優れた伝統の継承」と「化学および物理にまたがる総合的な新しい領域である分子科学の確立」でした。

昭和 38-40 年、日本化学会に設置された将来計画委員会において、分子研など新しい研究所の設立案が提案されました。日本化学会将来計画委員会では最終的に分子研を含む「6 研究所案」が結論され、日本学術会議に提案されました。昭和 40 年 10 月の日本学術会議総会において、6 研究所のうち分子研（仮称）の設立が承認さて、総理大臣に対して勧告が出されました。

学術会議の勧告を受けて、昭 41 年 2 月に分子研小委員会が設けられました。そこでの最初の構想は「東大附置の共同利用研」を設立することでした。いろいろな候補地が検討されましたが、結局この構想は昭和 43 年ごろの大学紛争のため、実現が困難になり、白紙にもどすことになりました。昭 45 年になって、分子研小委員会の委員交替があり、赤松秀雄先生が委員長に選出され、新たに「全国大学共同利用研」構想が提案され検討されました。

昭 47-48 年、特定研究「分子科学」が文部省によって認められ、全国の多数の分子科学研究者に研究費が配当されました。昭 49 年に「分子研創設準備室」が東京の物性研内に設置され、場所などが選定された結果、最終的に岡崎に決定されました。このようにして、昭和 36 年から長年にわたる関係者の努力が実り、昭和 50 年に分子研が設立されました。表 2 は、分子研設立に至る 14 年間の動きがまとめてあります。これらの主な動きに関する史料（委員会議事録など）から、当時の関係者の苦勞がしのべられます。

第5章 大学共同利用機関のアーカイブズ・分子研（木村）

表2. 分子研設立に至る14年間の主な動き

昭和36年	「分子科学」総合研究が認められる（文部省）
38-40	日本化学会・化学研究将来計画委員会において「6研究所」案
40	日本学術会議から総理大臣へ分子研設立の勧告
41	分子研小委員会において「東大附置研」構想
43-44	全国で大学紛争
45	分子研小委員会（委員交替後）において「大学共同利用研」構想
47-48	「分子科学」特定研究が認められる（文部省）
48	学術審議会から文部大臣へ分子研設立の要望
49	創設準備室の設置（東京）
50	岡崎に分子研設立

4. 史料収集の現状

上記のように、ほぼ14年間にわたる分子研設立の経緯の中で、「日本化学会・将来計画委員会」および「分子研・小委員会」が大きな役割を果たしてきました。長倉三郎先生はそれらの委員会の委員をされておられたので、当時の資料（議事録など）をもっておられ、最近それらを分子研史料室に提供していただくことができました。表3に日本化学会・将来計画委員会の主な資料、表4に分子研小委員会の主な資料がまとめられています。

表3. 日本化学会・化学研究将来計画委員会の主な議事録（長倉史料）

- 1) 日本化学会「化学研究将来計画」薬学・農化・日化 Joint-Committee（昭38）
- 2) 日本化学会「化学研究将来計画」第1回（昭39）
- 3) 日本学術会議「化学研究連絡委員会（化研連）」
化学研究将来計画第一次案（研究所案）（昭39）
- 4) 日本化学会「化学研究将来計画」第4回（昭39）7研究所案
[触媒総合、分子科学、天然物有機化学、基礎有機化学、高分子科学、地球化学、無機物質]
- 5) 日本化学会「化学研究将来計画」第5回（昭40）
「研究所設立案の最終確認」6研究所案
[天然物有機化学、高分子科学総合、錯体化学、分子科学、基礎有機化学、触媒総合]
- 6) 日本化学会「化学研究将来計画」第6回（昭40）化学会長から化研連への報告
「6研究所が必要との結論」
(あいうえお順)[高分子科学、触媒総合、基礎有機化学、錯体化学、天然物有機化学、分子科学]

第I部 本研究課題の成果報告

長倉先生によると、日本化学会・「化学研究将来計画委員会」第6回(昭40)の議事録が一番重要だとのこと。それは、その後、化学会会長から化研連(化学研究連絡委員会)への報告に際して、6研究所が必要との結論に結果的に結びついたからです。なお、ごく最近、長倉先生は分子研創設までのほぼ14年間の歴史を「分子科学研究所-前史」としてまとめられました。この原稿は「分子研レターズ」の次号に掲載予定です(文献4)。

表4. 分子研小委員会の主な資料(長倉史料)

-
- 1) 第1-5回分子科学研究所小委員会(昭41-42)
 - 2) 国立研究所として設立する案について(手書きメモ、昭44)
 - 3) 第6回分子研小委員会(昭44)
 - 4) 国立研究所としての分子研の性格と組織について
 - 5) 分子研について-計画(昭44)
 - 6) 分子研小委員会委員名簿(昭45)
-

また、井口洋夫先生(分子研3代目所長)は準備室長も務められました。準備室時代(昭和49年)の多数の資料をもっておられ、最近それらを史料室に提供していただくことができました。表5にそれらの主な史料がまとめてあります。

表5. 準備室時代および創設当時の史料(井口史料)

-
- 1) 教官人事(人事選考を含む)
 - 2) 土地および施設の作業部会
 - 3) 準備室の移行(東京 岡崎)
 - 4) 創設協力者会議(教授会議に換わる)
-

さらに、表6に挙げてあるような史料(分子研サーキュラー、創設協力者会議、分子科学研究会会報、分子科学若手の会-夏の学校、会報など)が細矢治夫お茶の水名誉教授・岩田未廣分子研名誉教授によって提供されました。ごく最近、中村宏樹分子研所長からも分子研サーキュラーが提供され、不足しているのは一冊(No.13)だけになりました。その他、岡崎統合事務センターから提供された多数の議事録類(評議員会、運営協議員会、運営連絡会議、学会等連絡会議など)や技術課からの「技術課活動報告」も史料室で保管しています。

第5章 大学共同利用機関のアーカイブズ・分子研（木村）

表 6. その他の史料

-
- 1) 分子研設立要望書ならびに設立案、分子科学特定研究報告、分子研要項など
 - 2) 評議員会（1-18）、運営連絡会（昭50-55）、運営（1-19）学会等連絡会（昭57-平3）
 - 3) 創設協力者会議（議事要旨および配付資料）第1回（昭50）- 14回（昭51）
 - 4) 写真アルバム（約30冊）：分子研竣工、創設披露宴、10周年記念式典など
 - 5) 分子研サーキュラー（No. 1-19、ただし、No. 13を除く）
 - 6) 分子科学研究会会報 No.1（昭42）、No.12（昭46）、第4期（昭50）- 第11期（昭61）
 - 7) 分子科学若手の会 - 夏の学校（昭39）、会報 No.2、4（昭48）など
 - 8) 分子研技術課活動報告（No. 1-22）
-

5. おわりに

今後、さらに分子研関係者に呼掛け、「分子研設立に関わる史料」や「創設第一期の史料」を補充するとともに、一層詳細な目録作成・整理方法などを検討するとともに、史料の複写やデジタル化（PDF）も進めていきたい。また、利用機関アーカイブズ室との連携を保ちながら、史料共有化の作業も検討していきたいと考えています。



図 1. 分子研の史料保管箱の状況

参考文献

- 1) 分子科学研究所創設 10 周年記念誌「十年の歩み」（昭和 50 年）
- 2) 分子科学研究所創設 30 周年記念誌「記念事業」（平成 17 年）
- 3) 分子研レポート 2006（平成 19 年）
- 4) 長倉三郎「分子科学研究所・前史」（平成 20 年、「分子研レターズ」掲載予定）